



Alcoholics Anonymous

こちらAA 専門家向けニューズレター

〒100-8692 東京都中央郵便局 私書箱916

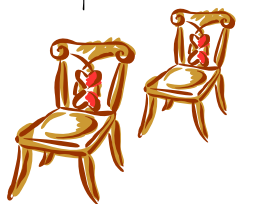
1999年 No.3 AA日本常任理事会 広報委員会

発行所 JSO AA日本ゼネラルサービスオフィス 〒171-0014東京都豊島区池袋4-17-10土屋ビル4F
TEL(03)3590-5377 FAX(03)3590-5419

寿でAAミーティングを聴く

須藤八千代

横浜市中福祉事務所ケースワーカー



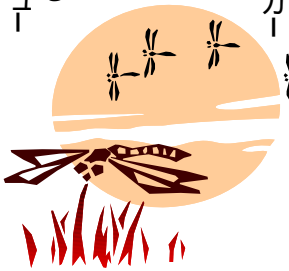
四年前に寿の街をかかえる中福祉事務所に転勤してきた。「ことぶき」といわれる場所は区役所から五、六分の所だ。二五〇メートル四方の狭い場所が、しかしそれ以外のどんな所とも違う光景をもって「街」を主張する。

初めて来た頃、朝の新聞にはアフリカのルワンダの紛争の生々しい写真が載っていた。そんな遠い国の悲惨さを伝える写真と余り変わらない姿が、そのまま自分の目の前に現れた。死んでいるのかとハッとするような怖さを感じて、恐る恐る横を通り過ぎた。酒に酔って新聞記事の写真的な遺体のように路上に転がる男たちに、今はもうドキドキしなくなった。

来たばかりの私は、外国の街を歩く時のように緊張して、寿労働センターの会議室で行われるAAのオープンミーティングに参加した。横浜市にケースワーカーとして長く勤務しながら、私はこの地域をほとんど知らなかった。一〇年以上も前、大きな会場でアルコール回復者の話を聞いた時、アル中になって生きる人の生と死を張り合わせた物語が、日本語で語られていないような印象をもった。それはストレートに、明確な意志を伝える英語で話されていた。そんな非日常的な言語空間を求めて、私は教えられたミーティング会場を目指して行った。

寿労働センターの会議室でのミーティングは月曜日と木曜日が、オープンである。寿労働センターは、寿の街のドーム(大聖堂)のような場所である。イタリアの都市がその真ん中にくくドーム大聖堂のようだ。会議室の前は図書館になっている。いつも人でいっぱいである。その上AAの看板がかかる会議室の前にさえ酔っぱらった男が寝ころび、それをまたいで中に入る。寿の街全体が酔っぱらっているなかで、そこにだけ酔っていない人たちがいる、そんな不思議な場所が寿のミーティング会場である。私がドアを開けると、ドーム(大聖堂)の奥の部屋で祈りを捧げる信者たちのように、机を囲んで一、三〇人の男女がステップの朗読を始めている。路上にたむろする人々の鋭い視線を感じながら「狂気」の空間を通り抜けると、一転そこだけがしらふの、正気の人々の集まりになるといつ舞台回りがおもしろい。

そして、当分ここで話を聴き続けよう、それが寿への私の接近方法だと決めた。そのミーティングの場がオープンだとしても、メンバー以外の人に会うことは少ない。中福祉事務所にも大勢のケースワーカーがいるが、この会場に顔を出す人はほとんどいない。中福祉事務所についていえば、アルコール問題とケースワーカーの関係は、コンピューターで事務的に処理する「仕事」になってきている。傷病や失業を理由にする保護の開始や、変更、廃止のコンピューターに向かう作業をとまなう人々の「できごと」の多くが、



飲酒した行為によって引き起こされている。実際、寿では死亡による廃止とアルコール依存症との相関性は大きい。死亡診断に結核やガンや、糖尿病などがあつたとしても、それらの病氣と死を結びつける接着剤はアルコール問題である。

「アルコール依存症は病氣である」という理論が依存者自身に与えた力が、ミーティングでしばしば語られる。病氣として手に取ってみることで、切除された患部を見つめるようにそれについて説明する言葉を獲得した。その言葉が治療する薬になる。しかし一方、ケースワーカーの仕事にもたらした結果といえ、他の病氣と並べられて、膨大なレセプトの紙の山のなかに挟まれてしまったような気がする。回復の驚きや、そのプロセスとなる言葉は、コンピューターに入力できない。ともかく、寿のAAに関心を示さないケースワーカーたちが多くあった。

私自身はアルコール依存者たちと面接する時の自分の言葉を、AAのミーティングに身を置くことで獲得した。口から出すだけの言葉ではなく、自分のなかで考える時の言葉も含めて、AAミーティングを聴くことで与えられた。

寿のミーティングの特徴は、言葉と生きてこなかった人がアル中になった結果、AAによって初めて口を開いて話し出したと感じさせる、プリミティブな語りである。次の言葉が続くのかハラハラさせるような不安定な語り、また滑らかに流れない発音のもつれが、無自覚に話してきた自分の言葉を振り返らせる。社会学者の桜井厚がいうように、経験としての生があり、暮らしの生があつても語りとしての生がなかった人々の、言葉の世界の始まりに立ち会うことのできる意味深さが、寿でAAを聴くという経験を形作る。

もう一人私が関心を持つ哲学者の鷲田清一は、「現場」というのはミーティングのように「複数の主体が共時的な相互接触へとさらされる場所」だといふ。一時間半という時間、あの部屋で語られる苦しさ、アルコールから逃れられない苦しさ、また回復の先に新しい生活が見えてこない苦しさ、そんな他者の苦しみの中に自分の身体をおいてこそ、私は現場にいると感じる。

そしてこの場所で私は、これ以上話したくないと思う。ここにいる人たちに比べると、私は話し過ぎた。今はただ聴くだけでいいと感じて座っている。彼らと反対に語りとしての生があるのに、経験としての生がないと言えぬのかもしれない。実際、AAメンバーの話す物語の豊かな文脈に抵抗できる物語など、私にはない。そんなことがよく分かった。だからミーティングの最後に、司会者に指名されたりすると語る準備を放棄しているためにつらたえる。つらたえた気持ちのまま、いつもその会場を出る。私が今試みようとしているのは、寿にわずかに残されたしらふの人々の言葉を聴くこと、そして、寿の街のベットのサイドに立つことができることを考えている。

AA出版案内

JSOにご連絡いただければ、AA出版物一覧をファクスでもお知らせいたします。ご利用ください。

発行所 AA・JSO内 AA日本出版局 (新刊)



そもそもAAグループとはなんなのか。ミーティングはどのような種類のものがあり、たとえば特別ミーティングはどう扱うのか。グループとしての役割をどう果たせばよいのか。また、グループの中のいろいろな係りを引き受けたメンバーはなにをすればよいのか。AA全体が存続するためにグループとしてなにをしたら……。などのヒントに
翻訳改訂A6版66ページ 頒布価格500円



なぜスポンサーシップが大切であり、また必要なのか。スポンサーを求めている人にも、スポンサーをしたいと思いますという人にも、また、スポンサー活動に取り組もうとしているグループにも、大変役立つパンフレットです。
翻訳改訂A6版44ページ 頒布価格300円



表紙、表記などを新しくしました。AAメンバーが無名であることが、ソーパーを続ける上に大切なことなど。
A6版16ページ 頒布価格200円



表紙、表記などを新しくしました。始めてAAに来る人たちにとてもわかりやすく、アルコールリズムとAAとの関わりが伝わってきます。
A6版20ページ 頒布価格200円

アルコール依存症からの回復 ～自己の再構成、そしてストーリーのできるまで～

渡辺 ひろみ (ファミニストカウンセラー・大学院研究生)



はじめに

約2年前より調査に着手し、今年はじめに書き上げた拙稿「アルコール依存症からの回復 - 自己の再構成、そしてストーリーのできるまで -」の一部を要約しながら、AAの紹介を試みたいと思う。

論文は、AAでのフィールド調査、および回復者(男性12名、女性10名、断酒会の会員も含む)

から得られたナラティブ・データをもとに、アルコール依存症からの回復のストーリーの再構成の試みであり、臨床社会学的な視座に基づいた嗜癖研究、特に「回復」当事者の「語り」に焦点を当てた研究と言えよう。

本論に入る前に、私の研究視座について若干の説明が必要かと思う。「嗜癖」に関しては、衝動強迫的に没頭する様式化された習慣であり、中断した場合手におえない不安感を生じさせるもの(A.ギデンズ 1992)とし、私は、アルコール依存症から回復してきた人たちを「SHG(セルフヘルプ・グループ)に参加し、自分のことを正直に語る体験を通じて『ライフスタイルの徹底的な変更と、自己のアイデンティティの再検討に着手』し、『自己についての叙述をもう一度書き改め』(A.ギデンズ 同上) 仲間とともにしらぶで生き、病と共に生きることを決意した人たち、(アルコールリクス・サバイバー)と名づけることにした。(サバイバーとは生き残った人の意味。)

私は当初より、できるだけ当事者に近い位置でもって、彼女/彼らの「語り」に耳を傾けたいと考えた。それは、観察する人-される人 関係(治す人-治される人、医者-患者関係にも通じる。)をも相対化したいと考えたからである。そのためにはまず、アルコール依存症を「病気」や「疾病」ととらえるのではなく、「病い」(生理的な問題に伴って起こる社会的/心理的現象)ととらえる必要があると考えた。「病気」というのは、社会・文化的に構成されるものであり、またその時代性を抜きには語れない。

研究手続きについては、約1年間にわたっての大阪府下にあるAAオープンミーティングにオブザーバーとして参加させていただいた。そこで知り合ったメンバー数人に声をかけ、個人インタビューが実現した。インタビューは半構成的な面接とし、1回~1~2時間(1人最低2回)。データのコード化を行ったり、カテゴリーやその特性などを抽出し、それらをメタレベルで分析するという方向性はなるべく取らず、できるだけ彼ら自身の生の「声」「語り」を忠実に記録したいと思った。

「自己の再構成」の場としてのAA

先にお断りしておくが、論文の約半分は当事者の「語り」で占められていると言ってもよく、ここではスペースの関係から、ほんの2、3の語りを紹介するとどめられる。

死ぬまで、私はアルコール依存症。うまくなんて飲めないのよ。...一滴飲んだら、死が待っている...。本当に厳しい病気...。(略)こわい病気になって、腹くっついていられるといわれても、やっぱりこわいわあ、だから生きるところまで行けという感じやね。私のすべては一つの人生を切り拓いていく奇跡に違いないね。プロセス...

これは完全に断酒して10年、アルコール依存症から回復してきたある女性の語りである。アルコール依存症という「本当に厳しい病気」、「こわい病気」になってしまったことの苦しみやとまどい、そして将来への不安がひしひしと伝わってくるが、と同時に病とともにある自らの人生を引き受け、切り拓いていこうとする覚悟を語る、力強い語りである。

次はソプラエティ14年の男性回復者の語りだが、AAへの参加、そこで正直に自分のことを語る「自己語り」の体験が、回復にとって重要な意味を持つことを強調している。

自分が見えた人というのは、回復していきますね。なによりも現状をありのまま、そのまんま、素直にぼつぼつと話してくれる人がいるんですね。あれが一番いい状況だと思うんですよ。正直に過去のことを話しているなあという人は、不思議とミーティングにつながっていくんですね。

彼らの多くは、ミーティングにはじめて出かけていったときのことを鮮明に覚えている。「何でこんなところにこなくちゃいけないのか...」といった気持ちや違和

感を感じると同時に、「オレはひとりじゃなかった」、「にこやかに笑っているアル中がいる」、「不思議と時間座っていることができた」などが語られる。回復へ向けてのかすかな希望に支えられ、ミーティングへの参加が新たな「習慣」として定着していき、そして、自分がここにいていいと思える「居場所」となっていくのである。

AAミーティングの目的についていろいろな見解があるが、私は特に次の二つを挙げたいと思う。一つは、孤立無援感からの解放。「一人じゃない」という感覚は、社会的帰属感の獲得へとつながるものだろう。二つ目は、自己の再構成のための他者との出会いの場。自己が自覚されるためには、非自己なるもの、つまり他者の存在を媒介としてなされなければならないのであって、彼らにとって、同苦者の仲間を得ること、「われわれ意識(感覚)」を得ること、自己語りの場を得ることは、再生の鍵となると考えられる。言いかえるならば、「モノログの世界」から「ダイアログの世界」へと広がる可能性がもたらされたのであり、閉じこめられていた彼らの人生(ストーリーと言いかえてもいいだろう)が、仲間を得ることでようやく開かれていく可能性を得たのである。

語ることの意味、「与えられたストーリー」から「自分で獲得したストーリー」へ通常、アルコール依存症からの回復するのは、「底つき体験」がなければならないと言われる。つまり、「ある体験」を一つのエピソード(個人の人生を根本的に変容させる力を持っている瞬間)として認識し、それを「底つき体験」として語ることにより、再生のきっかけとして引き受けていくプロセスである。ここで重要なのは、「体験」そのものではなく、むしろ「自己語り」において、「ある体験」を選択し、「底つき」、すなわち「回復の第1歩」と主体的に意味付与する、そのことが重要な意味を持つということだ。何を「底つき体験」とするかは個々人に任せられる性質のものであり、その質や量によるものではない。

インタビューで印象に残ったのは、「あとき」(例えば、子ども期や青年期のエピソードや飲んでいたときのこと)、「自分がなんでこうなのか(何をしているのか)、自分でもわからなかった...」という語りである。このような語りからは彼らの無念さが伝わってくるが、「正直に自分のことを語る」中で、「なにがなんだかわからない」状況から少しずつ抜け出す。語りは少しずつ変化し、「成長する自己」「回復途上の自己」、あるいは「いま・ここを生きる自己」が語られ、これら《回復のストーリー》を語る中で、彼らは「語り手」として同時に、ストーリーの「主人公」としての主体性を獲得していく。それはまた、「与えられたストーリー」(例えば、支配的な他者の人生に巻き込まれていた人生)から「自分で獲得したストーリー」へと、いま・この自分を肯定するストーリーに読み替えていく作業でもある。

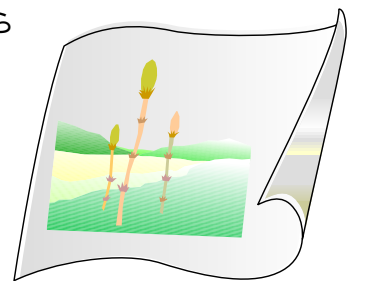
このような「自己語り」は、「酒を止めたいと思う人なら誰でも参加できる」、「言いつばなし・聞きばなし」、「話すことを強制されない」など、セルフヘルプ・グループならではの引き出されうるのではないだろうかと思う。AAは、いわば「語りの共同体」である。そこではさまざまなストーリー(物語)が創出される。飲んでいたときのことを語る反省的な語り、その日出されたテーマにそった自己言及的な語り、回復のプロセスに応じたそれぞれの語り...。それらの語りは、いま・この私を「語る身体(自己)」として実感しながら、過去を立脚点にした「リストーリーング」(語りなおし)の作業である。「閉じられた自己」(否認する自己)から「開かれた自己」(語られる自己)へ、そして「与えられたストーリー」から「自分で獲得したストーリー」へ、自己、およびストーリーが再帰的に生成される、いわば「語り」の装置を回復者は自らの中に組み込んだのであり、「回復」とは、「回復」を語るプロセス、まさに、「語り」行為という実践の中に「語られるもの」としてしか存在しないのである。

さいごに

最後に、60代の男性の語りを紹介したいと思います。

今朝、前におったところの会社の人と、 駅であつたんです。そういう意味では徐々に徐々に、私はいい方向に回復の道を導かれているなあと思いますねえ。その方も、「今、どうしている?」と聞かれましてねえ。「生活保護を受けている...」と素直に言えましたねえ。(略)人間関係が復活していますねえ。うれしいですよ。

この語りからは、新たなプライド、新たな力が生まれていることが伝わってくる。久しぶりに出会った旧知の人に、正直に今に自分を伝えることができた安堵感。「再び出会い直すことができた」という感覚は格別うれしい感覚であるに違いない。と同時に執拗な印象操作による自己の存在証明から解放された瞬間だったのではないだろうか。役割を解体し、制度への信頼性が薄らいだ社会、それに伴う自我の変容...、それら時代特性を有するいまという時代を、そして「終わりなき日常」を生き続けて行かなければならない。アルコール依存症の人たちに限らず、他の人々にとって「語り」のニーズが増幅している時代にあつて、AA、そして(アルコールリクス・サバイバー)の人たちに学ぶところは非常に大きいと私は考える。



JSOの業務時間 月曜日から金曜日 午前10時から午後6時(祝祭日は休み)

ホームページアドレス

☆関係する機関などで、この「専門家向けニューズレター」が届いていない場合は、どうぞ送付先を御連絡下さい。

<http://www4.justnet.ne.jp/~serenity/>